Nov. 1892

女學雜誌

第三百三拾壹號
甲の巻

明治二十五年
十一月五日發兌

注意

社說英雄辯はヒーロイズム。英雄の需要英雄の流行。無英雄眞天地。の三篇に分ち、英雄の眞相を穿ち、其長短を明かにし、其天職を示し、英雄自任者の愚を憫れみ、遂に、英雄の出るは歎ず可きことを切論す。青年諸君の一讀を要む。**武道の發源**三篇の上として、東洋に坐禪の國ありと題する鬱勃雄渾の道德論は、天知子の筆に成る、多年の實踐に徵して武道の精髓を發揭せんとす。此篇は其序論也。**鬼心非鬼心**は悲痛慘絕の實談を寫せるものにて脫天子が饑遼玄奧の文想涌くが如く、遂に人間是何如者の問題に說入して人の性情の內宮を開く。**批評**欄內極めて豐か也**香川景樹**翁の歌論に對する大西文學士の說を細評せるものは雲峰子の筆に成る、彼論出で、以來此評の如く細かきは未曾有。**關東營凱歌**は透谷子之を評す劇道得意の觀察は自ら門外漢の淺評に異なるものあらん。其他、編者自ら評したる、德川十五代史、近江聖人、紀文大盡、伊太利建國三傑、青年教育等固より無責任の輕評にあらず、文短なれ共任意長し。**時事**には、最大恨事、村橋久成、新き四男爵、開墾の偉業、新內藏頭、報知社長老、この下露、德川家康論、代言人試驗、二新聞無罪、公會議の妙、法界悲風、修身教科書、福澤翁銅像、大村益二郎、大演習、國民之友、北海屯田等の諸片あり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

[redacted]

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 331. NOVEMBER 5th. 1892.

EDITORIAL :--Heroism.

CRITICAL NOTES :—

LEADING ARTICLES :—Military Spirit, its Rise. The Anniversary of the Great Earthquake.

MISCELLANEOUS :—Malignity Thoughts of the Famine and the Earthquake in a Fruitful Autumn.

CURRENT EVENTS.

FRAGMENTS.

CONCERNING WOMEN.

本號(第三百三拾一號)目次

○社說　英雄辨（ヒーロイズム、英雄の需要英雄の流行、無英雄眞天地）

○批評　德川十五代史○近江聖人○紀文大盡○伊太利建國三傑○青年敎育○大西文學士香川景樹の歌論に對する批評（雪峯子）○關東譽凱歌（透谷子）

○論說　武道の發源（東洋に坐禪の國あり）○震災后一周年の感（山月子）

○雜錄　鬼心、非鬼心（脫蟬子）○豐秋に凶荒を想ひ震災を憶ふ（畜勸子）

○時事　最大恨事○村橋久成氏○新しき四男爵○開墾の偉業○新內藏頭○報知社長老○この下露○德川家康論○代言人試驗○二新聞無罪○公會議の妙○法界悲風○脩身敎科書○福澤翁銅像○大村益二郞○大演習○國民之友○北海屯田兵

○片々

前週(第三百三拾號)赤表

●社說　震災一周年（孤女學院を憶ふの感）○震地傳道隊

●小說　朝顏（遺言）（手習屋主人）

●史傳　臨終の母ウイラード

●兒籃　吾宿の花（第七回の中）若松しづ子

●家政　おさつの料理法數種○料理上の心得○茶話會（訪問の順序、湯風呂の位置、井筒の用材、土藏の用意、器物は實用を主とすべし、臨時の風塞ぎ、牛乳と石灰水、人乳より牛乳への移らせ方）○小金の砂二つ三つ（松茸の調理法、天麩羅の調理法、鯛の洗ひ調理法、湯豆腐の新調理法、柿の澁を拔く法）○シヤレ一ツ○

●雜錄　似非物語（ひさご）○今昔ものがたり（人間の果報もの、巧者、（器の用ひ方）（樂二ツ）

●摘要

●批評

●女報

●孤兒之友

前々週(第三百三拾號)白表

○社說　我國目前の經濟界

○論說　婚事雜感婚姻自箴、緣は天に在り、長し短し、爾ち自身の如ゝなれ、中央集愛、品性風采容貌、余に情交の愉快あり、江戶城下の奇見（天知子）

○批評　保羅之傳○近江聖人○青年會月報

○雜錄　秋窻雜記（透谷子）○獨嘯偶錄（詩歌愛吟）是空子○文界要報（脫蟬子）書齋一輿

○小說　一靑年異樣の述懷（つゆ子）

○片々

○附錄　敎育學講義

[redacted]

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第三百卅一號 明治二十五年十一月五日發兌

社説

英雄辯

（上）

ヒーロイズム

英雄なる者は、自信堅認の大塊物なり。此塊物の容易すく動からざるは、山上の巨石の俄かに動かざるに似たり。左れど、一と度び動くとを初むれば、落行急激、電雷の下るが如く、疾風の渡るが如く、巨濤の寄するが如し、轟々怒號して達せずんば休まず。荊棘は之が爲に折らる、密樹は之が爲めに倒さる、丘堤は之が爲に毀たる。抑そも何等の妨害ありと雖ども、彼の大塊物は、其達す可き地に達せずんば靜止するとなし。英雄なるもの〻一と度び激進するや、其形跡つねに之に似たり。

又、英雄は、直覺者なり、彼能く感ずれども、能く理解せず、能く行へども、能く辨ぜず、故に其舌未だ動かずして、其手すでに他の頭上にあり。彼すでに直感直覺して、其感覺を毫末も疑はず、故に、之を神の聲吾耳に聞えたるなりと信じ、此信を毛頭も疑はず。此に於てか、自個の爲す所ろは、正義なりと堅信し、此正義に反するものは皆な邪なりと確斷す。左れば、反するもの彌よ多ければ、邪いよ〳〵加われりとなし、此妨害彌よ多きに隨つて、其勇いよ〳〵加はる。

此故に、英雄は常に戰ふ。其骨髓は武なり、其裝ひは戰袍なり。彼は、能く食ひ能く飲めども、其飲食は軍酒兵糧にして、酔歌踏舞の宴饗にあらず。彼の愛するは、其味方を愛する也、彼の惡むは、其敵を惡む也。故に其愛の下には我黨、吾團結の字義を含む、一朝此の意義を失ふときは、讎敵の如し。然れども、其敵とするは、之に反對し、之に逆向するが爲による、故に一朝歸伏して吾下に屬すれば、感念潔然として變ず。其情けあるは之が爲め也、其怨あるは之が爲め也、而して怨恨情會の立談の間に變轉するも亦之が爲め也。

左れば、英雄の頭腦は、不權衡なり、一方より一方に偏執し、常に平均せず。然れども、何如なる權衡も能く之を平均せしむるとなし。彼は、其の不權衡を以て一大權衡なりと自信し、

何如なる他の信仰を以てすとも之を均平するとなし。而して其の自ら均平せんとする時に當ては、更に他の新しき不權衡に傾むけり。

此故に、英雄は、偏執なる事あり、我意なるとあり、左れば、哲學的ならぬとあり、神聖的ならぬとあり、時としては、氣違に近し、又時としては、我儘物に近し。然れども、此等の短所は、皆な愛す可き短所也。たとひ、我意を張ると雖ども、其張るは我意の爲にあらず、其眞理と認めたる事の爲に張る也、たゞ其の認むる所ろの眞理の圓滿的ならざるを憾む。たとひ、偏執なりとも、其偏執なるは、自利の爲にあらず、尤とも近き、尤とも直接なる害惡の爲めに胸を打ち、止むとを得ずして奮激熱中す。其偏執する時は、或る者の爲めに激熱する時也、而して其激熱する時は、自己全身を献ずるの時也、否、献ずと云はゞ既に不可也、献ずるにあらず、其全身を忘れたるの時也、既に自ら忘れたり、故に人之を稱して献じたりと云ふのみ。左れば、其偏執は、自利の偏執にあらずして、利他の偏執あり。此故に、偏執も、我意も、英雄の爲めの大短所なるとを忘る可らずといへども、此大短所は、亦た大ひに愛す可き短所なるとを記臆せざる可らず。

夫れ、英雄は、自信堅認す、而して其頭腦不權衡に、其心胸直感直覺す。勢ほひ、我意の見、偏執の識ありて、之を行るに、非凡の勢力を以てし、常に物の具を附けて凡衆と戰ふとなき能はず。而して、其戰ふや、必らず勝つ。たとひ全勝を得ざるとありとも、必らずや半勝を得るとあり。たとひ、半勝全勝を其一身生命あるの内に於て握收せざるも、其部下、其同志者、其續志者に於て必らず握收す。何んとなれば、英雄の如く、多く同意者を產むもの少なければ也。

此故に、英雄は常に出る者にあらず、而して常に出る者は英雄にあらず。英雄は一の激藥なり、天は之を或國民、或時代の爲に投ず。左れば、世人が常に藥を服用せざるが如く、此世は常に英雄を需むるとなし。英雄もし屢ば出では天下亂る、否な天下亂れて英雄の屢ば出るは吉兆にあらず。

然りと雖ども、人世は安樂の庭ならず、眞は一の戰塲なり、文明は、血より來り、樂園は、劍の影にかくる。勉勵は即ち戰爭にして、進步は其凱歌にあらずや。汝等つねに心して、夜、斷えず警戒す可し、人世は、墜落と榮光との關ケ原也、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

東西分け目の大戰爭つねに眼前にあり。

左らば、人世は常に彼の戰者たる英雄を要する乎。吾黨は之を然々と云ひ、又之を否々と言はんとす。然りと云ふは、吾黨の見解に付て云ふ也、否なと言ふは通俗の見解に付て言ふ也。蓋し通俗の所云る英雄なるものは、常に人世の要するものにあらず。

（中）　英雄の需要、英雄の流行

旅客の家を懷ふは、變移の間だに定處を慕へばなり、歲寒ふして松柏の珍らしきは、落莫たる矮木天を磨するの偉觀なければなり。夫れ、万衆喧騷、四方輕浮の時に當りて、彼の動かず變らざる堅信剛敢の偉人物を戀ひ慕ふ所以の者は、亦何んぞ此理わりに漏れんや。

今の我國は時恰かも移り行の時代に中れり。制度も、習慣も、道德も、宗敎も、惣じて、其根本を搖るぎ動かしたり。有明の月西の山の端に隱れて、日輪未だ東に登らず、四面尙くらし。舊き屋破壞せられて、新らしき館未だ成らず、人は安住す可き棲家を失なへり。人心の輕軟にして、万事の確固不拔ならざるは、蓋し止むヿを得ず。

此時に當りて、彼の堅信自認の人を慕ふ、此時に當りて彼の勇爲斷行の人を慕ふ、たとひ其德圓滿ならず、たとひ其才識偏執なりとも、斷じて行ひ、鬼神爲に泣く底の人を慕ふ。此の慕ひは世の必要より發せり。此に於てか、英雄崇拜論起る。英雄崇拜論起る。此に於てか、自ら英雄を以て任ずるもの亦續々として起る。

吾黨は、英雄を愛するもの也、然れども、英雄は決して最上の人物にあらざるヿを知れり。偉人は皆な英雄の資（ヒーロイズム）を備具せざる可らざるヿを思ふ、然れども、唯り英雄の資のみを以て人物の理想と爲す可らざるヿを知れり。英雄なるものが、或時代に必要なる如く、英雄の資は、完人物たる人の或部分の爲に必要なるヿを知れり。左れど、天下の人皆英雄たる可らず、天下の時常に英雄ある可らざるが如く、人は其人物の理想に於て純乎英雄を以て任ず可らざる也。

抑そも、英雄とは、人の他を稱して許す可き人格あり。之を自から許すは、即はち自から僻人物を以て許す也。僻人物を以て自から許す所ろの人にして、何の好き事をか成さん。苟

くも人の爲に盡す、當に周密圓滿を望むべし。苦慮煩悶して中夜想ひ思ひ、若くは慷慨切思して熱奮激勵する所あり、自己其の完きを認め、其最善なることを信じ、而して後ち之を人に施こす、之を人の至誠と云ふ。此至誠内に熟せずんば、百の偉業を爲すとも、他の靈性の爲に何の益かあらんや。左れど、人の智や欠あり、人の誠や完からず、自から完全を期するも尙ほ其偏僻あらんことを恐るべきに、初めより自から英雄を以て任じ、我は偏執せるものなりと許さんとす。其愚や憫れむべし、其陋や悪むべし、其慢として自から知らざる所ろ尤とも笑ふに堪ゆ。

此故に、眞の英雄は、自から彼の英雄たることを知らざる也、之を其友に聞くに、友も亦た彼が英雄たることを知らざる也、啻に其友のみならず、當世の人亦大率ね、彼が英雄たることを知らざるもの也。只だ棺蓋はれ、肉腐れて、而して後ち、后人評傳的、文明史的に之を評して彼を英雄となす。英雄の眞面目大概如此し。

吾黨は、今の我國の情勢に於て、英雄を崇拜するの當然なることを容認す。何んとなれば、今の我國には實に英雄者の資を要すること太はだ切なる者あれば也、英雄崇拜は、最上尤高の道念にはあらず、左れど確かに此道念に達するの階段たらずんばあらず。夫れ肉に餓る者は、草を食ふも尙可ならずや、彼の未だ聖眞の極を認識して之に歸依すること能はざる所ろの者は、暫らく人中の巨擘物……英雄を崇拜して、以て其の畏敬心を滿足するもの也。曰く、未だ最上の神權を認めざる者に於ては、英雄崇拜は一の道德也と、カーライル、及び、ヒウ、テイロル等が所論の眞義は即はち是也。

左れど、此英雄崇拜の時勢に乘じて、自から英雄を以て許す所ろの人物は、其の英雄を自任するの故によりて、確かに其英雄たらざるを知る他。近代の傑物パァネル、末年醜に陷いりて尙ほ悔るを知らず、執拗其地位に戀着し、揚言して曰へらく、吾もし此地位を離るればアイランドを何如んせんと。昔しは彼が幕下たり、又彼が助力者たりしマッカセー則はち曰く、此れ彼が最早愛兒蘭に用なきの證也、古來我ならではと自任したる英雄にして眞に其必要ありしものはあらずと。社員嘗て二葉亭主人と話す、彼冷然として曰く、世の中に英雄なるものはありと信ぜり、左れどアレが英雄なりと言はるゝ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

時は可笑しくなる、と。吾黨亦同感の情あり。

無英雄眞天地（下）

齊は一變して而して后ち魯となる可し、左れど、泰山に登る者は亦た魯を小となさゞるを得ず。彼の英雄崇拜論は、暫らく以て、世人を慰さむることを得べし、君子は之を以て安んずること能はず。況んや、宗教奥妙の玄を窺がひ、人間歸趣の秘を探れるものにして、試みに莊嚴なる天を拜して、以て自個眞心の聲に耳を欹つの時に於てをや。何如にして、淺薄細小なる英雄論を以て滿足することを得んや。

人生最大の敎師は、天地あつて以來未だ聞かざりし最靈最秀の聲を放つて、吾等に敎ゆる所あり、曰く、汝等、人の主たらんことを欲せば、先づ其僕となれ、人を使はんと欲せば、先づ使はるゝものとなれ、われは汝等の師なるに倘汝等の足を洗ふ、汝等も亦如此くすべし、夫れ、天國に入るものは幼兒なり、女の生みし子のうち、未曾てあらざりし英傑ヨハネも天國に於ける幼兒の一人にだに及ぶことあらずと。

英雄とは夫れ何ものぞ、其性格の質によりて之に名を附するとせば、吾黨は咎めず。但だ之を一種の偉人物となし、人間の中の優等者となし、而して、人自から之を以て任じ、他の非英雄の人を眼下に見、豪然として、公等碌々、平凡の人須からく乃公に仕ふ可しと言ふが如き意氣の輩あらば、吾黨は鞭を揚て之を追拂はんと欲す。

蓋し人に、優劣の意味を附す可き英雄、非英雄はあることなし。感情の激烈なる者、思慮の冷清なる者、識見の卓越せる者、膽力の强堅なる者、若くは、常識に富める者、多望なる者、平々凡々なる者、皆な夫々の器とす。而して器に種々あるは、器自身の力にあらず、他に之を造れる者あり。故に器は其器に隨て用を爲し、用を爲して、驕らず、驕らずして進み、進みて倘安んずるに至りて、人生の眞趣を得たりとす。苟くも此に得ずんば、人世は、痛恨也。才識は憂思なり。斷じて、高倘幽聖の平和を得ることあらず。彼の自稱英雄の常に平和なきは之が爲め也。其煩悶苦惱は、自から測らざるの罰也耳。

同胞須からく思ふべし、吾は人間なりと。人間たるの名稱は英雄と云ひ、豪傑と云ふの名稱に優ること萬々ならずや。吾は人間なり、頭らに上帝を拜し、手に同胞を握る、大道を歩みて進を直くし、眞理を見て靈性を練り、至誠を以て能ふ可き

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

を盡し、而して后ち信仰の量に隨ひて平らかに思ふ。吾靈性の伸ぶるは、苗の伸るが如し、昨宵今朝其如何にして伸るかを知らずして、而して其伸るは天の雨露による。吾事業の擧るは、木の長ずるが如し、之に肥し、之に培かひ、之を耕やし、之を養ふ、吾知れる當然の路によりて之を行ひたるのちは、其何如にして長ずるかを知らず、其長ずるは天の命也。吾は吾能ふべきを盡す。吾の人物は吾能ふべき進步の標式也。之を英雄とするも、凡人とするも、愚者とするも、關するとなし。何となれば、之を其以上何如にともすると能はざればなり。之を人としての當務及び安心とす、此外に何の英雄論を要せんや。

吾黨の日夜に祈る所は、至誠の足らざると也、吾黨の日夜に勉むる所は、人に使われんと也、吾黨の日夜に鍛錬する所は人の足を洗わんと也。此他に何んの暇ありて英雄たらんとするの餘地を存せん。夫れ、英雄、非英雄の別は、異敎徒の爲す所ろ也。吾黨の大敎師は言へり、神の前には、男もなく女もなく、主人もなく僕もなく、猶太人もなく異邦人もなしと。吾等は皆な只だ人類なり。

批評

○德川十五代史

水戸德川氏の舊臣にして、今は大學敎授たる內藤耻叟翁の著作にして、今回出でたる第一編は、慶長八年、家康、征夷大將軍に拜するの日より、慶長十九年四月二十六日、大阪城と將に戰あらんとするの前に於て筆を收む。

其例言に云へらく、余が德川氏の史を修めんと志しは、既に三十年前にあり、予が涉獵する所の記載僅に二千餘部に過ぎずと。其言太はだ謙なりと雖ども、當代の讀者は、翁が此の大著を歡迎せざるものなけん。其の例言の一に、

編年記事の躰裁は從昔國史の成法に依りて敢て之を改めず其濫に近今の新躰を學んで以て舊慣を紊亂せんとを恐れて也、

と云へるを捉へ、經濟記者は一擲して斥ぞけたりと雖ども、吾黨は翁の著作としては、寧ろ此舊躰に據れるを可なりとするもの也。二千餘部の記載を博踪編索するは、翁の如き長老に求めずんばある可らず。所云る開化史躰の新歷史は之を史

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

海一流の人に向て期せんとす。

編次の躰裁は、純然たる編年躰にして、間に小節細目を附錄し、前后の原委本末に及ぶ。中には、本多忠勝の傳を欠き、江戸普請の時の條々を錄する如き、脱漏と冗加との弊なきにあらねど、概するに畧ぼ備はれりと云ふ可し。

凡史の上にて未だ著名とならざる人物、例せば此冊中に二回短筆せられたる後藤少三郎の如き、又は、尋常の記錄にて作誤を傳へたる人物、例せば此冊中に三回酷責せられたる大久保長安の如きは、史家研究の爲めの面白き好題目なり。されど、翁は素より之に向つて獨創の批評を試みず、寧ろ例によりて、邪教に關するもの、徳川氏に不利なるものを、悉とく擯斥せり。

此卷の末、大久保忠隣に關する條に及びて、家康が大坂に對する陰謀密策の形跡を雲霧摸糊の間に隱見せしめ、一讀する所ろ、家康の爲に頗ぶる不利なるが如き記事少なしとせず。されど、翁が之を以て家康を多しとするとは、其家康論あるものを聞くに及びて判然すべし。

此卷通讀者の快に堪へざるは、家康が諸侯を制統し、御撫し、抑揚するの跡歷々として見るべきの所にあり。佐野正綱、辛澤山の城より、江戸の火あるを望み、馳せて都に上伺したるが爲めに、領地を沒收せられ、后四五日直ちに其城毀却せらるゝが如き政策前后に滿てり。十五世、三百年の覇業を起したる、巨怪人の籌策、多少此書により編次一貫して寫し出されたるを面白しとす。

○近江聖人

盖し少年讀本となさんが爲めの故か、所ろ〳〵寄席にて、落語家に聽く如き言調のあればにや、山月子は此書を評して、其の嚴肅ならざるとを不可とせり。吾黨も亦た之に同意す。左れど、とにかく一種の妙筆を以て、巧みに記述したれば、讀者を動かして、涙潸然たらしむる節も亦無きにあらず。抑そも、近江聖人は、單に聖人と敬稱して、之を世より遠ざけ離つ可き人物にはあらず、彼は王陽明の學徒にして、熊澤蕃山の師たり。其心に夙に王佐を以て任じ、非凡卓拔の識見あり。想ふに我國出産の巨人中、正に第一流者の初に推すべきもの也。吾黨久しく先生を敬し、且つ先生に服するもの、當今政界の混濁を察して、先生の敎を祖述せんとするの念淺からず。

故に此一小冊子は、先生の高徳を記す未だ百に一を得ざるものと雖ども、ホソナを賛ふ群兒の一人先づ出でたりとして密かに感謝の念ひなきにあらず。

○紀文大盡

之も同じ著者村井絃齋氏の作なればとて、同時に讀む。例の如く、落語めきて面白く書きたるが、此書に於ては寧ろ恰好の躰裁と思はるゝ所ろあり。左れど、前なると此とを合せ讀みて第一に感ぜらるゝは、絃齋君が少年讀者の爲に案ずる所の未だ必らず深からずと思はるゝと是也。抱一庵主人が「大石良雄」を讀むものは、其用意の信切なるとを感ずるものあらん。今ま「近江聖人」と「紀文大盡」とを併覽するものをして、同様の感なからしむるを憾みとす。且や「紀文大盡」は、必ずしも今の少年讀本の最好題目にあらず、願はくは「鹽原多助」を併せ示して、儉勤の商徳を示すとを得ん。

○伊太利建國三傑

國民新聞社中に於て最とも春秋に富み、英書に通じ、加るに筆鋒犀利なり、と徳富君が紹介したる平田久氏の著なりとす。筆才俊逸、實にも疎暢明快の文にてはあれど、殆んど切要なしと思はるべき事實をも多く編入して能く好調に言ははされたるは、感ずべくもあり亦惜むべくもある哉。固より當然の事にてはあれど、亦蓋著者が私淑する所ありてによるか、其カブールを寫すに於ては太はだ至れりと雖も、マッチニの熱ガリバルヂの俠を描くに於て、其同情の足ざる心地なきに非ず。要するに、此書の長所は、其文の流暢たる所ろにあり、而して短所も亦此に存す。三傑異色の功蹟を書き分けたるとは、之に許す可し。かゝる小冊子に於て第一に旨とすべき、人物性格を抽出するの點に於て、未だ足らざる者あるを覺ゆ。附錄とせる建國史年表は、エムマヌエル帝の死去を脱せる如きともあれど、便利にして有益なる注意より成れり。

○青年敎育

此は「國民之友」に時々掲載したる敎育論を一輯せるものなれば、其篇々に付きて、評論するとを止め、茲に、民友社が書籍出版に潜心苦慮するとの尋常ならざるを、賛せんと欲す。世人は、かの社が雜誌及び新聞紙に常に一種の趣向あるを認たむ、左れど、其書籍出版に、更に一層の用意あるとを認ざるが如し。彼社は、先づ人氣を鼓吹して而して后ち書籍を出す、若

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

とは、人氣既に熟するを待て而して后ち之を出す。故に、其出す所の書籍は、時勢及人氣を示す一の指風標也。此點に於ては、時事社すら尚ほ及ばずと言はん。今若し國民叢書に就て言はしめば、保守反動一轉せんとするの機に於て「進步乎退步乎」出でたり。人物論流行せんとする機に於て、「人物管見」出でたり。而して、對文部省の人氣既に弘く激昂し、彼社員が法庭に於て、近來稀有の大快論辨を爲しくれたるの時機に於て、此「青年と教育」とは出でたる也。而して、大方の其著作を通じて、一の理想貫徹せるは、尤とも喜こぶ可し、其主義を汎布するに於て、勉めたりと云ふ可し。

大西祝氏の「香川景樹翁歌論」に就て

雲峯子

近來和文學の隆盛に伴ふて歌道亦大に興れるが如し。是と同時に歌道の大家として尊崇せらるゝに至りしものは即ち桂園翁香川景樹なりとす。翁が未だ世に在りし時より、早く已に多くの反對者ありて、暴語惡言以て翁の歌を非難し、亦其議論を攻擊するものありしが如く、其死後に於ても亦反對者の絕ゆる事なし。翁の名愈高ければ攻擊非難の聲亦益高きに至るは夫れ自然の數か。

然れども反對者の增加すると同時に、亦翁を敬慕し、翁の遺教を順奉するもの次第に多きを加ふるを見る。是豈翁が絕世の大聖なりしが故に非るか。苟も一派を立て、一說を創めんと欲するもの、反對敵抗の起るを覺悟せずして可ならんや。翁が在世の時已に幾多の排擊ありしを翁は知悉せり。其後世に批評を受くるも、思ふに早く覺悟したりけん。

翁の歌論は格別大冊子として存するものなし。只新學異見のみ小冊子となして刋行せりき。その餘は古今正義の序及び、門人を敎導する爲に詠草に書きつけたる片文斷章に存するのみ。然れども熟讀すれば翁が歌道に於ける議論を見るに難しとせず。われ常に翁を追慕し、其歌論につきて聊か所論なきにあらず。偶大西祝氏の翁が歌論を論評せるもの去月國民の友紙上に見えたり(一六四、一六六號)、先覺者の辨論あらんよを思ひ、聊か愚考を陳するを見合せたり、然れども未だはか〲しく論辨する者あらず、早稻田文學に井上通泰氏の意見ありと云ふもの出でたれど、甚だ短簡にして且直接に大西氏

の議論を批評せるにもあらず。此に於て不肖少しく桂園翁の爲に辨じ、併せて大西氏に質す所あらんとす。

第一　香川翁とウオルヅウオルスと。大西氏が此兩者を比較するの卓見、余誠に敬服す、彼の歌と、是の詩と共に玉石混合する事、兩者共に平易の語を以て平易の事を詩歌に作りし事、亦不思議にも、彼我の時勢相似たる事等實によく符合するを見る。此點に於ては更に異議なし。只尙精細の愚見あり長文に渉るを恐れ、此に省く。

第二　香川翁と加茂翁と。眞淵が一代の大家たること論なし而して其和歌々論にも見るべき所多し。思ふに景樹が歌論とて悉く獨特自發に非ずして、眞淵が説のありし爲め起りし議論もあらん。然れども單に眞淵の議論によりて景樹の所説は出でたり、眞淵は預言者にして、彼出でざりせば、景樹の歌論はなかりしならんとは云ふ可からず、そはウオルヅウオルスに先だちてクーパーありしと雖も、更に夫れより先きに、ミルトンありしが如く、眞淵に先ちて紀貫之ありたればなり。景樹が如何に貫之を崇拜し、其古今集序及土佐日記等より彼が得たる所如何に大なるかを見れば、景樹が歌論の起因も亦明白なり。彼時弊を慨嘆し、悪習を罵倒し、天下の歌人を一手に引受けて辨論し、其新説創論を世に示せしかども、紀貫之には數歩を讓り、遙に己が上に在りと自白せり。歌に於ては赤人、人麿より古今時代の凡河内躬恒、紀度則等に至る迄數人の歌聖をも敬慕せりき。然れども其後の歌人に至りては彼が崇拜せしものなし、其眞淵が説を攻撃せしが如きは、彼が貫之より得たる歌論と異る所あればなり。眞淵が「古の歌は調をもはらとせり、謠ふものなれば也」と云へるは歌躰の上にありて、景樹の所謂調とは其根本の思想に於て同じからず。大西氏新學と新學異見とを引照して兩者の歌論は景樹が云ふ如く大差なかるべしと云ひ、「萬の物の父母なる天地は、春夏秋冬を爲しぬ、そが中に生るゝ物、こを別ち得るからにうたひ出る歌の調もしか也」とあるは景樹の云ふ所とけぢめなきにあらずやと云へり。景樹在世の時或人の新學異見を難ぜしに左の如き文あり。

新學に古歌は調を專とせり云々と云へるは、古の歌は歌ひあげし物なれば專調に意を盡せし物なりと云ふ也、專と爲の詞、彼の僞飾のしるし也、然らば我徒の歌は爲すの意なし

やと云はんに、誠は誠を爲すの爲方あり、されば調を專とせりと云ふ語我徒の語ならばさてもすむ事也、眞淵にして取られぬ也、調と云ふものも、專と云ふ意も氷炭の違ひありてやがて爲すの主意かはる故也、云々。

眞淵が調と云へるものは全く歌躰の上に存せしこと、新學を見て明白ならずや。

かく意得たる後には後撰拾遺の歌集、古今六帖、古き物語書等をも見よ、かくて立かへり、古事記、日本紀をよみ、續日本記の宣命、延喜式の祝詞の巻抔をよく見ば、自ら古き語の文をも綴らるべき也云々、

こは只文章の上なれど、其外形につきて古を貴び、昔を慕ひ只管古人の風躰に摸倣せんとせしは明白なり。或は「萬葉を學びて其心を知り」と云ひ、「古の歌は萬の人の眞心なり」と云へりしを見れば、やがて景樹の誠實を說けりしと同じきが如く見ゆれども、何故に兩者の間相違を來せしかと云ふに、眞淵は其眞心を現はすの方法は只古昔の言語に依るべきものと思ひしと、景樹は然にあらず、今日普通の言語にて云ひ得ると說きしとの別なり、眞淵曰く

歌は聊の言も違ひては歌をなさねば、彼を問ひ、是を考へて、よく唱へ得る時は、古言定まれり、然れば古言をよく知るべきものも古き歌なり、……先づ古の歌を學びて、古風の歌をよみ、次に古の文を學びて、古風の文をつらね、云々。

短歌は只心高く調ゆたけきを貴めば、言も撰までは叶なはず云々。

その入たゝむ初には女は源氏物語抔を學ばゝ自から書き得べし、然れど是に止まれりと思ふとなかれ、後に古き樣に上るべき心しらひして學ばゝ終に宜しく成行なん云々。

是を以て見れば眞淵が歌文の躰は古の言語を知らざれば得べからずとなし、新學開巻第一行に調云々と云へるは即ち此古代の言語を用ゆるにありとの意なると明けし。試に眞淵がよめりし長歌を見よ。彼が如何に古風に泥みしかは一目して知らる可し。

之を景樹が古言古語を用ゆ可からず、「其時々の言語もて詠むべし」と云ひ、亦「其世の躰を躰とせずして何時の躰を姿とせん」と云へりしが如きは即ち大に眞淵と異る所也、彼是等しく

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

萬葉古今を慕ひ、山柿紀凡を崇拜せしと云へども、其敬慕する點を異にせりき。即ち眞淵は古歌の誠實質朴と歌躰とを合せ學ばんと欲し、景樹は只誠實てふ一點を取らんとせり、此故に其議論及歌に於て非常の相違を生じたりき。

是に依て熟考ふるに新學及新學異見の議論を比較し來らば、或點に於ては大西氏の云はれし如く兩者殆んど相同じきが如しと雖も、若之を同じとせば、他の相異の議論の出所終に分明ならざるに歸着せん、即ち其古言ならでは調べをなさずと云ふと、誠實より調はなりて舊新の言語に關せずと云ふとは等しく調と云へども同じからず、是彼等が議論の根本異る所にして、其餘の枝葉に至りて同一ならざるは正に理の然るべき所ならずや、之を例せんか、大宮より二道の鐵路相並びて北に馳す、其始めや兩道相接近す、暫くして相分れ、終に東西相反して行くに至る、眞景兩者の議論は恰も此鐵路の如しとや云ふ可からむ、ヨシ一歩を讓りて其新學異見のみは新學ありしが爲めに出でたりとするも、古今正義に於て、貫之の序を玩味し、終に和歌は誠實より出でざる可からずと悟了せし所までも尙眞淵ありて而して出でたりと爲すか、景樹が幼少の時より歌道に於て卓見を有し、亦古今集を夙に愛讀し、遂に一家の議論を立てし事も、眞淵の爲め、且景樹が創見を示さんの野心より起れりと云ふか。

われ思ふに景樹の景樹たる所は古今集によりて悟了會得せし議論及び其實行にありて存すと。眞淵の議論の有無に關せずして、景樹の歌論の大部分（幾分は眞淵の爲に出でしとするも）は必らず現はるべき事なりしならむ。

○關原譽凱歌（櫻痴居士著）　透谷子

浮田秀家伊吹山落足の物語を骨子とする事作者の自序にも見へたり。矢野進藤兩士の俠骨義膽は作者の尤も精神を籠めて點出したるものと察せらる。

若し子細に此作に現はれ出づる人物を撿すれば、驚ろくべき程に多數の詩趣的人物を集めたるを見ん。家康より、秀家あり、三成あり、行長あり、進藤あり、矢野あり、滋野あり、玉藻あり、是等の諸輩個々獨立して詩人の頭腦に入らば、各自に一主人公と爲るを得べき程の者どもなり。從つて各幕各場の有樣を見るに、甲の幕に於ては甲のもの主人公となり、

乙の幕に於ては乙の人主人公となる。兩士會合の塲と、其他二三のものを除くの外は、兩士を正面に立てゝ、その人物を描き出たりと信ずる能はず。

歌占の滋野、兩士の會合、秀家三成の不熟、家康の出陣、伊吹山の落人等みなそれ〴〵の妙趣ありて、なか〳〵に凡手の及ぶところにあらずと雖、いかにせむ個々特立して、一中心に總合するの美を認むる能はざるを。讀み去つて感嘆の辭を發するは作者が多數の人物を點綴するの妙にあり。詮じ來つて評難を加ふべきは、その主觀的創造の致なきにあり。

然れどもあながちに居士を責むべきにあらず、今の梨園の事情を知るものは居士が甘んじて斯類の脚本を作るの止むべからざるものあるを推察するを得む。團、菊、二優の掣肘を受けたる趣きは作者の自序にも明言せり。その自然に居士を抑壓する弊根のいかに深きやを讀者と共に梨園詩人に憐れむところなくんばあるべからず。噫、詩人と優人との主客の顚倒すると既に久し誰か能く之を匡濟するものぞ。

優人の爲に脚本の作り、脚本の爲に優人を作らず、わがこの新作に對して深くこの弊を感じたるものは、從來の居士の諸作に比して此作は一層の舞臺好みの奴隷と爲り了したるを認むればなり。要するに此著は平凡の作にあらず、恐く居士の著作中にも上位を占むべきものならんか。別して劇に演ずべき時代物としては、都度〳〵當りを取るべきものと思はる。

論説

武道の發源

天知子

(上段)東洋に坐禪の國あり

有形動物中に我れは靈なりと誇唱する人類は、美（廣き意味なる）を愛好して之れを組立てんとするの天職を特有せり、廣義なる美は即ち狹義的美と及び眞と善とを包含するものたれば、人として美を想ふ程高尚なる理想は非ざるなり、此理想なるものは實に想像が產む所の寧馨兒たり而して此寧馨兒を遊ばしむるの幼稚園は那所ぞ、此想像をして逍遙遊せしむるの園は那所ぞ、思ふに『朦朧』てふ絶大の宇宙なるべし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

朦朧ほど面白き宇宙はあらず、詩人が恍々として醉臥し傲々として濶歩し、得意のイマヂチーションを或は無極大に或は無極小に、憚らず恣まゝにするを得るの大靈界たるべし、照りもせず曇りも果ても春の夜の朧月夜に若くものぞなきといふもの、詩想の極致此點に在て存す。

地球全局面を若し東西二洋に限るとして觀るを得ば、朦朧の氣は東洋に靉靆として立籠めたるものを見ん、若し物質的の肉界を解脱して靈眼を拭ひ來るの人あらば、誰も東洋の思想境に燦然たるものあるを覰ざらんや。サイナイ山顛雷鳴轟き、万里の沙漠にマナを覩得し、大靈の神なるを識らずして形と音聲とを以て直接に顯はれ給ふ神を信じ、酋長的の習慣腦髓に多少偶像的臭味を免かれざる思想を以て律義剛直に、ニポーと尊信して熱禱犧牲の民と成り、豪邁偉大の豫言者を立たしめて靈界に凱歌し、只管メシヤを呼びて殆んど天外に徹せんとす、而して吾人が理想のゴッドを認めず、而かも亦ジーザスを以てメシヤなりと信ずるを得ざりき。斯くの如き二千年前舊約時代の靈民は、吾人東洋に於て又相似たる甚しき者を見る。試に斑々たる東洋史を全綴して繙き見よ、其國民が非常なる熱心を以て、帝釋天毘沙門天等より、八百萬の神々、阿彌陀如來、弓矢八幡等を唱へて酋長的習慣の思想を確信して身命を之れに擲ち、更に天帝、眞君等と稱し、一層其道念を高めて靈界を支配し、宏大の眼識は宇宙を握り万化其身に生ぜるの概ありて而して至靈絶大のゴッドを認識するを拒み、イザヤモーゼ等の英雄的豫言者をして後へに瞠若たらしむべき、此尤物を縱橫に濶歩せしむべき樂土を作り、先づ穆々として偉大なる黄帝を出し、大龍蟠まる如き老聃を產ましめ、激騰すべき莊周出で、同時にヒマレー山氣、凝て巍然たるストダナ王宮產聲高く靈太子釋迦を現出す、而して一層愕くべき偉物なる香至國の碧眼太子菩提多羅は、達摩と稱して東洋を默行せり、其他多くの偉人は或は僧侶に或は行者に或は武士に或は隱士に或は厭世者に或は道家に、續々現はれて道を唱へ靈を叫び、各々思想境に奔命して氣焔を吐けり、其斷食法、坐禪法、無爲恬淡法、難行苦行法等の如きは彼等が肉界を解脱して靈界に產まれんとする主觀的修養法なりき。夫れ斯くの如くして人世朦朧時代なる舊約世界は、全く

東洋に覆面と成りて、粗大なる靈界は此朦朧の底に未だ穿鑿の手を解せずして現存せる淵藪と成り居るあり。

斯くの如き大靈界の一隅に當りて、古來天の攝理の命ずる所より、衣を薄くし食を粗にし、菜食して道を樂み、慾寡にして貪進を禁じ、孤坐默々として人と交るを避け、永らく利害得失の上に超然として世外に坐禪修行するの巨人あり、此人骨瘦せ躰倭く、茅蘆に寒居し粗膳に貧坐するを見て、肉界の俗物之れを嘲笑して輕蔑措かず、以て竪子圖るに足らずと爲す、然れども動物的肉界の進歩と退歩との如きは、舊約的此巨人をして修道の暇顧るに足らしめざりしなり、寧ろ其有形界の退歩は即ち靈界修養の進歩たりしを滿足するならん。抑々此奇怪の巨人を誰とか爲す、是れ薄弱纎少にして極めて豪氣なる日本群嶋なる者是れなり。

日本は實に二千五百年間も專ら主觀的修養に默坐したる坐禪の國なりし、若し形而下肉界の陋眼を以て進歩を論ずる如く、金錢を殖し腕力を強くし俗智を博ふし而して獸慾を誇張するのみを以て文明なりと論ぜば、日本は西洋各國に遠く及ぶ可らずと甘從すべし、然れども日本の天職は靈界にありて王たらんとするにあり、道にありて眞文明を講究せんとするにあり。斯く言はゞ人或は言はん、其思想境に於て其靈界に於て日本何の優りし所ありやと、然れども學校に學びし子供は寺子屋に學びし子供に優りたるを見て寺子屋教授の子供は愚鈍なりと妄言すると勿れ、寺子屋に學びて抜群なる子供をして學校に教育せば何かなる結果を生ずるやを思考せずんば非ず。西洋は千八百年前に於て已に舊約時代を終りたりと雖ども、日本は舊約時代を永く練習して漸く近年新約時代に遷りたる時期なるとを記憶すべし、彼れはクライストを直示せられて大教師の下に教育せられたり、其高尚靈調の風物を見る何の驚嘆するとかある、天、教師を我れに降すとなく傳道を直接に聽くを得ざりしに於てすら、尚此著しき靈の發達を見るにあらずや、若し日本の地にしてクライストを發現せしめ天籟を直聞せしむるを得せしめば、其文學に美術に宗教に事業に將た人物に、非常なる超西洋の現象を見たるなるべし。

日本ほど思想境の多忙なる國はあらざるなり、鄭重に深く裏面を觀察し見よ、種々の宗教が日本に入るや否や、忽ち一變して現はれ來るを見るならん。其佛教が內地に輸入し來るや

忽ち種々の宗派を創立し、各々開祖たる英物を作りて其形躰を變化せり、殊に禪の一度日本に齎らし來らるゝや、忽ちにして日本歷史を動かし、英雄豪傑に洗禮を與へて氣風を一轉せしむるに至る。若し然らずとするものあらば鎌倉時代に一大線を劃して其前後に現れ來りし英雄の人物を觀察し見よ、前は野蠻的腕力の豪傑多く、後は道士的幽雅にして一種靈味ある英雄の多きを見るならん。而して禪は暫らくにして愈々日本と消化し日本と提携し、茶の湯、俳諧、武術に觸れて其靈氣を顯はし、茶道先づ興り俳諧道次で興り而して武道は一段の光彩を放つて日本全土を形造れり、此等は皆之れ日本の產みたる道にして、神道も亦種々の形を以て古來道を叫ぶこと久し。今やクリスト教亦百方淘汰を經て日本の洗禮を受け、漸く靈化してアリアンが幼なき信仰に甘んぜず、正に日本的に消化せんとする大慶時の機に際せり、吾人何ぞ惰眠せんや、吾人何ぞ熱禱して道に進むを忘るゝの時なるべきか、思ふに古來紛々たる宗教は漸々流浪して東洋の一孤嶋に來集し、ペイブルは東洋に受洗して破天動地の一大宗教を鍛冶し、意外なる世界大舞臺の一隅より躍出するものあるを知るに至るべし、靈界亦多望の時といふべし。

人は開發的に鍛錬するを得ば最も墮落を免かるべし、舊約時代は則ち此主觀的修養の法に勉めざる者なかりし、今や將さに注入的傳道に徑捷なる新約時代に一歩を踏込みぬ、其客觀的修養は又之れ大に取るべき幸福時なりと雖ども、終に安んじて薄志弱行の道士を多出するの大弊を見るものたり、故に此際最も吾人が務むべきは舊約時代の修養觀念をも捨てざることにあるなり。

噫、外なる人は何かに壞るゝとも內なる人は日々に新たなり、若し吾同胞四千万をして、日本が靈界に於て万國の上に輕からざる天職あることを覺悟せしめば、日本は實に永遠死せざるの天國なり、万代不易の万國王たり。昔し頑迷なるジユースは其天職を誤認して、諸王の王たりといふメシヤをして終に肉界の帝王たらんと信じ、狐に穴あり野鳥に巢あるも其枕する所なき大王を輕侮し、終に靈肉共に滅亡の淵に陷りたるも尙ほ悟らず、全く天職を暴殄し了んぬ。悲しいかな、今日吾邦の大勢を見るに、腕力的の武を以て日本の魂なりと叫び、策略的の智を以て處世の秘訣なりと信じ、人爵的の名譽を以

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

て青年の元氣と稱し、金錢を畢生の目的として富國之れのみなりと心得、パイレートの愚言を學びて眞理とは何ぞやと嘲る者あり、大道は土木學にて講究すべきものと思ふ者あり、閨門臭氣深く郊外淫風なまめく、斯くの如くして最も短所を以て万國に對峙せんとし、天職を放擲して青年輕動す、青年は何を以て新日本を那地に建設せんとするか、日本とは何、愛國とは何、元氣とは何、日本人民とは何、大和義民とは何、抑青年とは何ぞや、前途漠々猶長煙の消へ往く先きを見る如し、エルサレムよエルサレムよの警句、轉々今昔の感に慄然たらざるを得んや。

大厦高樓に愕き魁偉健體に膽を奪はるゝは靈界の勇將たる日本青年の愧づる所に非ずや、况んや漫りに心酔して其物質的摸倣を學ぶの痴なるをや、我れは靈の子なり靈の王なりと言ひ聰かしむるの確信あらしめよ、吾れは强腕に懼れて卑々僕從し、以て倭柔なる日本民族として生存するよりは、寧ろ道を傳へ眞理に死して日本と共に斃るゝの愛國者たらざる可らず、千歳櫟樹たらんよりは寧ろ道を行ふて天職に死するの短命者たるに若く可らず、是れ人間が最も長壽にして靈の世界に永遠の勳爵士たる生命たり。

余は此に到りて思はず他感に筆を走らしたるを氣付けり、而して余が後段に述べんとする所のものは、此靈界の天職を負へる日本國が、默々坐禪の中に於て多年修養し得て殆んど日本の元氣と成り、而して一段の光彩を放つて日本全土を形造れりと述べたる、武道に付て、少しく之を觀察し以て余が抱懷せる思想を述べんとせり、文字多く文長し、期して以て後に讓る。

震災後一周年の感

山月子

大地震ひ、山岳崩れ、家屋倒れ、人畜死す、猛火天を焦して焔烟土塵に交じり、鮮血地を染めて苦聲秋風に和す、煉瓦の下に灰の中に、母の遺骸を尋ぬる愛子あり、生きながらに人を呑みたる地裂を望みて、慘然戰慄する傷者あり、悲む者泣く者幾々萬、新紙傳へ、人口和し、愁聲全國に聞ゆ、嗟呼此悲慘哀傷の活畫は、去年の今月今日、突如として濃尾の地に畫き出されたり、義者の手は之が爲めに動き、佳人の涙は之が爲めに注がれたりき。

日月回り轉りて既に一周年、秋風吹て寒鴉樹梢に叫ぶ、去年を想ひ、慘狀を思へば、粛然襟を正さゝるを得ず、

請ふ吾人をして先づ自らを正しうせしめよ、先づ愛の人たらしめよ、正しき人に非ずして誰か正しき神を識らん、愛の人に非ずして誰か愛の神を識らん、愛よ、正義よ、願くは吾等と共なれ、而して靜かに今日熟考する所あらしめよ、

二千五百有餘年の日本は、幾多の變遷を經たり、或は亂れ、或は治まり、或は美に、或は醜に、一波一瀾、時に高く時に低し、國民漫に昇平を謠ふ時に於て、動もすれば腐敗に傾き易し、近時の社會を瞥見し來れば、不徳、不義、僞善、虛喝の聲、教育に、文學に、事業に、政治に、時を得顏に關係し運動し、愛すべく又憐むべき國民は、知らずして滔々墮落の淵に沈まんとせり、嗟呼『忠信なりし邑いかにして妓女とはなれる、昔しは公平にてみち正義その中にやどりしに今は人をころす者ばかりとなりぬ』

至愛公義の神は、猶此國民を棄て給はず、其沈淪より救はんとして、去年の震災を下し給へり、嗟呼此震災――此愛の鉄鞭は、實に國民に向ての警戒なり、訓諭なり、吾人は傷める人に同情を表すると共に、神に對して感謝せり、『萬軍のエホバわれらに少しの遺をとゞめ給ふことなくば我儕はソドムのごとく又ゴモラに同じかりしならん』

抑も此國民警戒の心、謹慎の思は、果して幾月幾日永續せしや、現今日本の人民は、忘れ易き人民なり、朝たに泣きて夕べに笑ふ、何ぞ其輕佻浮薄なるや、警戒の焼點たりし名古屋、岐阜の地、殊に淫靡惰弱に赴くは何ぞや、而も此光景に對して、義憤を發し愛涙を流すの士幾人ありや、基督が神を愛し、人を愛し、國を愛して、エルサレムの城を望みて泣き給ひし如く、ゲッセマネの園に血の滴りの如き汗を流して祈り給ひし如く、同胞の爲め邦家の爲め、至誠を凝らして神に祈る者幾人ありや、紛々たる假面愛國家、其慷慨と悲憤と、恰も煙火の如く、藁の火の如く、外觀徒らに壯んにして忽ち消滅す、夫れ炎々として火山の火の晝夜斷へざるが如き活火を有し、潤々として膏雨の草木を養ひ、いつの間にやら之を長大ならしむるが如き愛の涙を有する者に非ずして、焉くんぞ能く國民を警醒し、救導することを得ん。

『シオンは公平をもてあがなはれ、歸來るものも正義をもて贖はるべし』吾人先づ神意に合ふ者となりて、此同胞をして、國家をして、神意に合ふ者とならしめざるべからず、
昔しはヤコブ夢に天使を見、エホバの聲を聞き、覺めて其處に石柱を建て、永く紀念とせり、今や震災後一周年、吾人は嚴肅に謹愼に、自己の心中に神の愛と義を刻銘し、永く久しく之を保存し、世波の浮沈に關せず、毅然として勇進すべし、而して現世を導き後世を照すべし、基督の血は、必ず吾人をして之を成就せしむることを信ず。

明治二十五年十月　十八日　　謹んで書す

雜錄

鬼心非鬼心（實聞）

脱蟬子

悲しき事の、さても世には多きものかな、われは今讀者と共に、しばらく空想と虚榮の幻影を離れて、まことにありし一悲劇を語るを聞かむ。

語るものはわがこの夏暫時の假の宿とたのみし家の隣に住みし按摩男なり。ありし事がらは、そがまうへなる禪寺の墓地にして、頃は去歳の初秋とか言へり。

二本榎に朝夕の烟も細き一かまどあり、主人は八百屋にして、かつぎうりを以て營とす、そが妻との間に三五ばかりなる娘ひとりと、六歳になりたる小兒とあり。夫は實直なる性なれば家業に懈ることなく、妻も日頃謹愼の質にして物多く言はぬほど糸針の道には心掛ありしとのうはさなり。かゝればかまどの烟細しとは言ひながら其日其日を送るに太き息吐く程にはあらず、折には小金貸し出す勢ひさへもありきと言ふものもありけり。

妻の何某はいつの頃よりか何となく氣鬱の樣子見へ始めたれど家内のものは更なり、近所合壁のやからも左したる事とは心付かず、唯だ年長けたる娘のみはさすが母の氣むずかげなるを面白からず思ひしとぞ。世のありさま三四年このかた金融の逼迫より、種々の轉變を見しが、別して其日かせぎの商人の上には輕からぬ不幸を生ぜしも多かり。正直をもて商賣するものに不正の損失を蒙らせ、眞面目に道を歩むもの

に突當りて荷を損ずるやうの事漸く多くなれりと覺ゆ。かの夫妻未だ左したる困厄には陷らねど、思はしからぬが苦情の元なれば時として夫婦顏を赤めるなどの事もありしとぞ。裡家風情の例として、其日に得たる錢をも明日の米を買ふ事なれば、米一粒の尊さは餘人の能く知るところにあらず。或日の事とて妻は娘を家に殘しつ、小兒を携へて出で行きしが、米買ふ錢を算へつゝ、ふと其口を洩れたる言葉は「もしこの小兒なかりせば日々に二錢を省くとを得べきに」なりし。之を聞きたる少娘は左までに怪しみもせざりし。その容貌にも殊更に思はるゝところはあらざりしとなむ。

このあたりの名寺なる東禪寺は境廣く樹古く陰鬱として深山に入るの思あらしむ。この境内に一條の山徑あり、高輪より二本榎に通ず、近きを擇むもの、こゝを往還することゝなれり。累々たる墳墓の地、苔滑らかに草深し、もゝちの人の魂魄無明の夢に入るのところ。わがかしこに棲みし時には朝夕杖を携へて幽思を發ひしところ。又た無邪氣の友と共に山いちごの實を拾ひて樂みしところなり。

家を出でゝ程久しきに、母も弟も還ること遲し、鴉は杜に急げども歸らぬ人の影は破れし籬の夕陽の照光にうつらず。幾度か立出でゝ、出で行きし方を眺むれど、沈み勝なる母の面は更なり、此頃とんぼ追ひの仲間に入りて樂しく遊びはじめたる弟の形も見へず。日は全く暮れぬれども未だ歸らず。案じわびて待つうちに、雨戸の外に人の音しければ急ぎ戸を開くに、母ひとり忙然として立てり。」その樣子怪しげに見へはせしものゝ、いかに悲しき事のありけんとは思ひもよらず。弟は、と問へば、しばし默然たりしが、何かは知らず太息と共に、あれは殺して來たよ、と答へぬ。

始めは戯れならむと思ひしが、その容貌の青ざめたるさへあるに、夜の事とて共に歸らぬ弟の身の不思議さに、何處にてと問ひければ、東禪寺裡にてと答ふ。驚ろき呆れて、半ば疑ひながらも、母の言ひたるところに、走り行きて見れば、こはいかに、無殘や一人の弟は倒まに、墓の門なる石桶にうち沈められてあり。其傍になまぐさき血の迸りかゝれる痕を見りと言へば、水にて殺せしにあらで、石に撃つけてのちに水に入れたりと覺たり氣も絕へ入んほどに愕き惑ひしが、走り還りて泣き叫びつゝ、近隣の人を呼ければ、漸く其筋の人も來

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

りて死躰の始末は終りしが、殺せし人の繼しき中にもあらぬ母の身にてありながら、鬼にもあらぬ鬼心をそしらぬものもなかりけり。

東禪寺寺内より高輪の町に出でんとする細徑に覆ひかゝれる一老松あり。晝は近傍の頑童等こゝに來りて松下の細流に小魚を網する事もあれど夜に入りては蛙のみ雨を誘ひて鳴き騷げども、その濁れる音調を驚ろき休ます足音とては稀に聞くのみなり。寺内に棲みける彼の按摩、その業の爲にはかゝる寂寥にも慣れたれば、夜出でゝ夜歸るにこわさといふもの未だ覺え知らず、五月雨の細々たる陰雨の中に一二度は彼燐火をも見たれど、左して怖るゝ心も越らじと言へり。

雨少しくそぼちて桐の靑葉の重げに垂るゝ一夜、暮すぎて未だ程もあらせず、例の如く家を出でゝ彼の老松の下に來掛りし時、突然片影より顯はれ出るものありと見る間に、わが身にひたとかじりつき、逃げんとするも逃げられず、膽潰れながらも、その人を見れば、髮は亂れて肩にからみ、色は夜目にも靑白ろく、鬼にやあらむ人にやあらむ、と思ふばかり、身はわな〳〵とふるひて、振り離さん程の力もなくなれり。

やうやく氣を沈めて其人の態をつく〴〵打ち眺むれば、まがふ方なき狂女なり。さては鬼にもあらずと心稍々安堵したれば、何故にわれを留むるやと問ひしに、唯だ さめ〴〵と泣くのみなり。再三再四問ひたる後に、答へて曰ふやう、妾は今宵この山のうしろまで行かねばならずと。何用ありて行くやと問ひければ、そこにて兒を殺したる事あれば、こよひは我も共に死なむと思ひてなり。この言を聞きて、さては前日の兒殺よなと心付きたれば、更に氣味あしく、いかにもして振離して逃げんとすれど、狂女の力常の女の腕にあらずしばしがほどは或は賺しつ或はなだめつ、得意客は待ちあぐみてあらむに、いかにせばやと案じわづらふばかりなり。いかに言ふとも一向に聞き入れず、死なねば濟まずとのみ言ひ募りて、捕へし袖を挽きて吾を彼の山中に連れ行んとす。もし愈々死なむとならば獨り行きても宜からずやと言へば、ひとりにては寂しき路を通ひがたしと言ふ。幸にも、この時角燈の光微かにかなたに見へければ、聲を擧げて巡行の査官を呼び玆に始めて蘇生の思を爲せり。

始めは査官言を盡して說き諭しけれど、一向に聞入れねば、

止むとを得ずして、他の査官を傭ひ來りつ、遂に警察署へ送り入れぬ。

彼女は是より精神病院に送られしが數月の後に、病全く癒へて、その夫の家に歸りけれど、夫妻とも元の家には住まず、いづれへか移りて、噂のみはこのあたりにのこりけるとぞ。

以上はわが自から聞きしところなり。但し聞きたるは、この夏の事、筆にものして世の人の同情を請はんと思ひたちしは、今日土曜日の夜、秋雨紅葉を染むるの時なり。

殺さんと思ひたちしは偶然の狂亂よりなりし、されども斯の如き悲劇の、斯くの如き徒爾の狂亂より成りし事を思へば、まがつみの魔力いかに迅且大ならずや。親として子を殺し、子として親を殺す、大逆不道此上もあらず、然るに斯般の惡逆の往々にして世間に行はるゝを見ては、誰か悽惻として人間の運命のはかなきを思はざらむ。狂女心底より狂ならず、醒め來りて一夜悲悼に堪へず、兒の血を濺ぎしところに行きて己れを殺さんとす、己れを殺す爲に、その悲しき場所に獨り行くことを得ず却つて路傍の人を連れ立てんとを請ふ、狂にして狂ならず、狂ならずして猶ほ狂なり、われや子を思ふ親の情の、狂亂の中に隱在すればなるらむ。その狂亂の原はいかに、渠が出でがけに曰ひし一言、深く社會の罪を刻めり。

昨夜は淵明が食を乞ふの詩を讀みて其淸節の高きに服し、今夜は慘憺たる實聞をものして、思はず袖を濕らしけり。知らぬうちとて、默思逍遙の好地と思ひしところ、この物語を聞きてよりは、自からに足をそのあたりに向けずなりにき。かの地に住みし時この文を作らず、却つて今の菴にうつりて之を書くは、わが悲悼の念のかしこにては餘りに强かりければなり。思へば世には不思議なるほどに酸鼻のこともあるものかな。

豐秋に凶荒を想ひ震災を憶ふ

畜鵝子

天保四年癸巳、初夏より時季不順霖雨止まず。當時二宮報德先生野州櫻町にあり。或時茄子を食するに、其味常に異なり恰かも季秋の茄子の如し。先生箸を投じ歎じて曰、初夏に當り此物既に季秋の味をなす、豈唯ならんや。是を以て考るに

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

陽發の氣薄くして、陰氣既に盛なり。何を以て米穀豐熟するとを得ん、豫め非常に備へずんば、百姓飢餓の憂に罹らん歟。玆に於て一戸毎に一反歩、其貢税を免ずべし、速に稗を蒔飢饉を免るゝの種とせよ、忽にすべからずと。

然るに天保七年に至り、雨天冷氣、盛夏と雖ども、北風の寒きこと膚を切るが如く、常に衣を重ねたり。而して其年の饑饉たるや、實に天明の凶歳より甚しく、關八州奥羽飢民夥だしく、餓莩道路に横はり、行人潛然として面を掩て過るに至る。曩に先生は、天運數あり、遲くして五六十年、早くして三四十年、必ず凶荒饑饉あるを思ひ、三年にして、三邑の稗數千石を備へ、一人五苞、一戸數拾苞、豐年猶ほ此の如く豐なるを得ず。民皆先生の功德により飢饉を免るとを得、心を謹み、誠を勸め、先生の敎を奉じて、朝は未明に起きて繩を索ひ、日力田圃に力を盡し、夜は亦繩をなひ、莚を打ち、來る年に備ふ。天災は變じて大幸となるべしと。

嗚呼我最多數の國民は、今秋豐作の万歳を謡ひ、臨時祭典、俄狂言、村芝居。或は服を買ひ、時計を求め、餅を搗く。豐歳續きて蓄財薄し。嗚呼聞かずや、禍福は糾へる繩の如し、喜の裏に悲しみあり、心せよ我最多數の國民。悲しむ者は福なりとは救主の言に非ずや。明年は稗を蒔の歳には非ざる歟。嗚呼去年今月今日は、轟然一聲、大地鳴動、尾濃三百里の堤坊は爲に波動し、死者負傷は幾千万なるを知らず、而して傷者未だ愈ず、治水全く整はざる今日、人心浮薄、淫風、放蕩、震災前に比して一層甚だし。嗚呼本年秋收豐ありと雖も、人民の奢侈を見。來るべき凶荒を想ひ、去りにし震災を憶へば、豈肅然たらざるを得んや、感極つて之を書す。

明治廿五年十月廿八日朝

時事

流行する短評を好まず。通俗太たく好くと云ふと雖ど、吾黨は好もしからずとて、暫らく此欄を止めしに、是非續けよと勸むる人多し。特に友人中に多ければ、扨てはとて再び初む。たゞ所云る「時事」とは異なり、言短かしと雖ども悉とく責任を負ふ、壯言大語又は寸評短批して自から快を爲すの意斷じて無し。

○最大恨事

云く、天賦の技能を有して現世の報酬を得ざる者の多きは人

間社會の最大恨事なり、國家が天賦の技能ある人をして沈淪せしむるは、豈に義務を怠るの甚しき者に非ずや、强は弱を壓し衆は寡を抑ゆ、天賦の技能を抱く者が其力を伸す能はざるは、其人の罪にあらずして寧ろ其國の罪なりと謂ふべし、社會の改良、國家の革新、若し其急なる者を言ふを許さば、今世未だ此大恨事を滅ずるよりも急なるは莫けん、報酬を得ずして力を伸ばし能はざる者は世間に多し、吾輩は見て人間の最大恨事と爲し、此恨事の結果は早晩必らず報酬問題と爲りて社會に動くと彼の歐洲の社會主義の如きに至るべきを信ずる也、と『日本』去七日來の論說は「日本」の當に慨言すべきものとす。當世、他の何の新聞紙にて如此き痛言を聞くを得ん。

○村橋久成氏

當年倫敦の留學生、森、鮫島は皆名を遺して死せり。獨り、義俠慈愛の一才子、遂に北海に志を得ずして空しく飄零流落し、近き頃ろ、神戸葺合村の途上にて行倒れて死しぬ。遺恨誰に向つて寄せん、遙かに其亡靈に對して弔す。

○新しき四男爵

近日の快事中、松井、米田、ことに伊達兩氏が、ともに男爵に列せられしとの如き快事は少なし。新聞紙は報ず、此等の新華族は、其品位を保持するに足る十分の財產あるが故に、何れも恩賜金はなしと。然れば、彼の維新風雲の成上り者、大方の新伯爵連は、其華族たるの品位を維持するに足らずとして、恩賜金を辱くせしと見えたり。夫れ、人爵の天爵の上に加はるは、聖者が黃金の冠せしに似たり、されど是なくして、品好くもあらぬ下郎が華族など稱ふるをこそ、沐猴の冠せしとは云ふべきなれ。

○開墾の偉業

而して、尤とも快なるは、伊達邦成君の受爵にありとす。且、邦成君をして、彼の偉業を奏功せしめたるは、其家宰田村顯允氏の力尤とも多きに居る。世人は此の無名無爵の開墾王を重んぜずんばある可らず。

○新內藏頭

天下の横着物と評したる新聞紙も、白根專一氏が今回內藏頭たるを喜ぶものに似たり。兎に角、剛敢、自任、此人の如き、今の官員世界に多からず。寧ろ祝すべき歟。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

○報知社長老

白髮の遺臣、莊辭を讀むと。此の遺臣、今まや復た報知社に入れり。願はくは、此翁をして、單に漠索たる舊事を語らしむる勿れ、吾黨が翁に要むる所ろのもの、他にあり。

○この下露

亞細亞第六十二號紙上「この下露」は何人の作ぞ、病呂泣とは誰が匿名ぞ。中ごろ、人の才能は地位に密接せしむるを要すとは、友某が箴言ありと書し、次に曰く、我を教ゆる人あらば、余は鶵鷲の如けん、然れども及ぶ可らざるを學ばず、我を愛する人あらば、余は小羊の如けん、然れども己を知らざるの盲愛を受けず、我を用る人あらば余は獅子の如けん、堯にも吠へん、桀をも噛まん、と。作者の人物略ぼ察知すべし。而して文中多く「友」の字を用ゆ、何んぞ其同情を樂しむの念切々たるや。現代何ぞ此類乎あらずして獨り潜むの士多かるべし、たゞ文字公刊の事あるを太平世界の慶運とす。

○德川家康論

史學普及雜誌第二號に、內藤恥叟君が「德川氏興業」の論見え、先づ家康の籌策を說く。恥叟君にして斯く論ぜんとは、德川十五代史を讀みたる時に定かには知られざりき。もとより家康は斯る人物なり、左れど水戸德川氏の遺臣にして、斯の如く明白に、而も斯の如く得意に論ぜらるゝに至りては、志士が一顧一讀を要するの價値あらんとす。其の秀吉に對して織田信雄を助くるの心術を說きては、

家康公は憤然として秀吉公の不義を惡むと稱して……我義名を以て天下忠義の心を感動せんと謀られし籌策也

其の、秀吉に招かれ、上洛する時の心術を說きて、

是れ仁を以て天下の人心を動かさんとする內慮なるべし今日は天下の難に當りて死せんとの仁言を以て天下の民心を攬らんと謀られたるは…………

其の、豐臣の孤兒寡婦を欺きて滅亡せしめたる心術を說きて

家康公は信長公の死せしときより既に豐臣氏を除きて之に代らんとするの心ありしは疑なし

恥叟君にとりては、非常の論の如く見ゆるならずや。

○代言人試驗

兼て問題を知り居りし者あれば、漏せし者ある也。二百名內外の受驗者之を知り居りしと云へば、之を傳へし者ある也。

斯く公けに分明となりしを寧ろ祝す、嚴しく出處を穿鑿して毎々の弊根を斷然芟除せざる可らず。

○二新聞無罪

國民新聞も、改進新聞も、無罪となりぬ。新聞紙の口の自由となるは、國民の口の自由となる也。ことに、今回は、一は文部省に關し、他は海軍省に關せり、而して尙ほ斯の如く好結果に了せしを尤とも妙とす。

○公會議の妙

公會議の妙は、互ひに相訐き、以て一種の制裁を爲すにあり。是れ理想上の完德に非ずと雖ども、社會道德の進路に於て、亦一と度び無る可らざるものなり。近日、市參事會の處置及び本郷區長免職の事に連係し、長谷川泰氏の建議委員說、東京市會に出でたり。十分に洗滌ふと、當に水道の如くなるべし。

○法界悲音

曹洞宗越本山永平寺の貫首森田悟有師より、同花本山總持寺の貫首畔上楳仙師に對し、宗制違約の廉を以て速に退隱す可しとの申告書を送り、楳仙師は亦拒絕書を送りたり。兩つの書共に新聞紙に見ゆ。既に新聞紙に見ゆるに至りては、宗教界勸告の途は絕たり。昔しは、義貞、尊氏に向つて一騎直談判を求め、西南の役、甲東は單騎、南洲を見んとなしぬ。世界尙ほ此人あり、法界豈に其人なからんや。檀下坐上に今少しく靜談閑話の方はなきや。返す〳〵も、法界の悶着話しは恨めしきものにて、亦久しきもの也。

○修身教科書

文部大臣は、訓令第八號を以て、小學校修身教科用圖書は、可成多數の圖書中に就き最とも善良なるものを撰擇す可きに付き、撿定濟の圖書多く出るを俟ち、明治二十七年四月以后に於て之を審査採定すべしと告げたり。之れ止むを得ざる最后唯一の手段なるべし。左るにても、不德人物が、不德手段によりて修身教科書に金をもうけんとする世の中こそ悲しけれ。小學子弟こそ憫れなれ。甘服して之を用ゆる教師こそ意氣地なけれ。

○福澤翁銅像

要するに一の英資ある福澤翁は、推重すべき先輩也。この人自ら翁と稱するだに、先生能欺人の感なきにあらざるに、

此の度は、慶應義塾内に、其銅像を建立する計畫あるよし。翁何んぞ之を辭止せざる。建像は末年又は死後の事也。翁の如きは尙文明時代の少年にあらずや。

○大村益二郎

大村益二郎の像稍やくにして立てり。其形を見れば、是れ大村益二郎なり、兵部大輔の姿にはあらず。

○大演習

治に居て亂を忘れざるを武人の本領とす、時々此の大演習あるは然る可きと也。就中此度は汽車の運用を主とし、文明流の器械によりて勝を制するの工夫を演ず、日本も追々進步すと云ふ可し。夫れ、劒は拔かずして能く威服するを重んじ、兵は戰はずして先づ勝を制するを好とす。冀らくは、明年世界大博覽會の後ち、外客を多く招いて一大演習を試みんことを。

○國民之友

國民之友近來秀論多し。其進步黨大連合の策論を讀めると久しと雖ども、第百六十九號、其「公武合躰」の論に勝りて能く此の眞意を表明したる者なし。亦、其平民主義の呼聲を聞きたると久しけれども、第百七十號、其「平民道德」の論に勝りて能く此の旨義を發揮したる者なし。前者に於て、政論家たる民友子の識見を窺ふ。後者に於て、事務家たる民友子の抱負を察す。

○北海屯田兵

經國第十六號に、其事情大要を揭ぐ、中に云く、

屯田兵應募者は大抵中等以下の人民を多しとす故に金錢上の事にのみ卑劣にして毫も高尙優美の思藻なく只だ猜疑の念强し此こに一有利の業を計畫する者あるも何時も成熟するとなし……今日の有樣にては下に人才あるも其驥足を伸べしめず士官等の中にも人才と云ふべき人才なく到底兵村の發達を望むべきにあらず　悲哉屯田兵中一般に通じて義慨の氣、愛國の心、地を掃ふて空し。

片々

可愛子編

●東京青年會　◎松村介石氏には、神田仲猿樂町東京青年會の囑托講師として、毎月四五回、或は日曜日、或は土曜日、講話會に於て演說說教せらるゝことなりぬ。◎東京青年會副會長　は之れまで嶋田三郎氏のみなりしが、過日同會臨時理事會に於て同會運動を捗らせん爲め、且會長三好退藏氏を補佐せん爲め、副會長二名を撰擧することを議決し、木村駿吉氏を擧げて之に當らしむることに決したり、同氏は每週一二回會館に出張し會務を監督せらるゝといふ。

●ドクトル、ヘボン氏の歸養　多年我國の爲めに盡力されたるドクトル、ヘボン氏並に令夫人が本國に歸省せらるゝに付き、橫濱に於て、東京に於て、共に送別會を開かれたり、集る者寂然感涙に咽ぶ者多かりき、同氏夫婦には十月二十二日橫濱より乘船出發せられ、見送り人は頗る多かりしとぞ。

●クラーク氏の來遊　米國を發し世界漫遊の途に上りしエンデヷー會の發祖クラーク氏夫婦は近々オスタラリヤを發し、本月十日橫濱着の豫定なりと。

●水戶基督教青年會　は十月第三土曜日例會を同市上市荒木町講義所に開き、岡崎義高、高木信吉、生駒親孝三氏の演說ありたり。

●青年夜學會　甲州郡內桂村字上暮地に開ける青年夜學會は、基督教信者分部盛之氏の發起にて益有望なり、會員十餘名、分部友三郎氏等よく働けり。

●栃木少年禁酒矯風會　は同縣下上都賀郡落合村大字長畑黑川李八氏の發起にかゝる。

●幼年會　福嶋縣下若松基督教青年會中には幼年部あり、之を分て男女の二とす男子幼年部は每土曜日七時より會す、會するもの二十名若くは二十四五名にして演說の習練をなし、兼て幼年に適する書籍雜誌を求め、小圖書館を有して借覽に供し、更に進で求道者贊成家の家を訪て敎に關する書籍等の閱覽を奬勵するの働を始めんとせり、女子幼年部は每土曜日午後二時より會す、十二三名より十六七名位の會合にて、講話を聞き贊美唱歌等を學び居れり、

●宮城書籍館月報　宮城縣仙臺市の同館九月中の開館日數は廿八日にして、貸出書籍三千九百十八册、此人員五百十八人にして、來觀一日平均八十六册廿七人、帶出は五十三册十八人なりといふ。

●東北學院と朝鮮人　朝鮮は東方問題に大關係ある、尤も注目すべき國柄なるにつき、仙臺東北學院にては、同國の青年を連れ來りて敎育せんとする由。

●丹後通信

◎川上青年研智會　は丹后熊野郡川上村青年の團結にして、其會員は村內有名の士拾餘名を名譽會員とし、正會員は、僅に拾有余名なれども、川上青年の實權を握り、凡そ青年に起りし事は大小となく此會のために左右せらる、元來川上村は山間の一隅に位せる地なるを以て、其民從て未開にて古來の弊に馴れ、狂言(青年の素人芝居にして一ヶ月以前より每日每夜是を習ひ其爲めに費す金は少くして三百圓)など興行することを多し、今之が跡を斷ちしは、全く研智會員の其非を稱へしに因らずんばあらず、又避邑の常として女子の就學大に少なく、其男子の廿分の一にも當らざりしが、一昨年來會員の各區に屢演說會を開き、女子教育の必要を論破せしより近來漸く十分の一以上に至れり、然れども會員は之に滿足せず農民閒暇の期節には、更に氣焔を張らんと意氣込居れり。◎此地高等小學校に隔る一里以上なれば通學者少なく尋常小學科を卒業せしものにして中途廢學するもの多きを以て、其補ひを爲さしめんために夜學の必要を感じ、各區に夜學校の設立を促し、各會員主動者となり奮勵し、當時追々旺盛に趣き、其會員多きは三十名少きも二十名に下らず、其數四にして夏秋は每月六回、春冬は每月隔晚若くは十回にして、尙更に此事業を擴張せんと本年は各夜學會を聯合し、公然一大冬期學校を設置せんと目下委員に於て取調中とす　◎目下地方德義の腐敗は其極點に達し、研智會員夜學會員は、超然演說に幻燈に雜誌に矯正の策を講ずれども、人心の改良は中々容易の事に非ず、宗教の力によらんにも、佛敎家は白川夜舟共に談ずるに足らず、已むなくんば基督敎の力を借らんにも、其宣敎師を聘するにも、地不便にして大に困却なり、如何に善後策を施さんかと會員互に腦髓を絞り目下研究中なり。

假令われ諸の人の言および天使の言を語るとも若し愛なくば鳴銅や響鈸の如し、假令われ預言するの能あり又すべての奥義と諸の學術に達し又山を移すほどなる諸の信仰ありと雖も若し愛なくば數るに足らぬものなり、假令われ我がすべての所有を施し又焚るゝために我が身軆を予ると も若し愛なくば我に益なし、愛は寬忍をなし又人の益を圖るなり愛は妬まず誇らず驕傲らず非禮を行はず、己の利を求めず輕々しく怒らず人の惡を念はず、不義を喜ばず眞理を喜び、凡そ事包容おほよそ事信じ凡そ事望み凡そ事忍なり、愛は永久も墮ることなし……中略……それ信仰と望と愛と此三の者は常に有なり此うち尤も大なる者は愛なり(新約聖書哥林多書前十三章)。

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

子爵品川公題辭　農學士原田清太郎氏　井上謙造氏　校　河相大三氏述

乳牛及製乳新書

紙數二百九拾餘頁
精好圖五拾餘面入
正價金四拾六錢
郵稅金六錢

吾邦從來此類の著書に乏しく牧牛手引草の一書纔に世に行はれしも今や同書も亦品切となりて一本をたに求め得へからす本書の編者河相大三氏は弊社の社員にして斯學を講究すること玆に日有り加ふるに農學士原田清太郎及井上謙造二氏の叮嚀なる校讐を經たれは當業者に益すること尠少ならさるは固く信する所なり紙員殆んと三百頁精圖五十有餘面乳牛の種類及飼養方等より各種の製乳法に至るまて學理實驗並擧けて洩す所なし故に牧畜家製乳家は勿論學校參考用として必ず一本を備へさるへからさる最新最全の良書なり

●本書目次大要

第一編　乳牛
乳牛の種類
ゼルシー種
ホルスタイン種
エーアシア種
ガルンジー種
短角種
附岩泉牛
乳牛の撰擇
牛齢
角を見て年齢を知る法
歯を撿して年齢を知る法
乳鏡
乳牛の飼料
乳牛の飼養
夏期の飼養
秋期の飼養
冬期の飼養
春期の飼養
飼養者の實驗説
飼料と乳汁との關係
交尾及分娩
仔牛の飼養
搾乳の方法
乳汁の總説
乳汁の氣味
乳牛の撿査
乳汁比重の撿査
乳汁脂肪の撿査
乳汁中混合物の撿査
第二編　製乳
煉乳製造法
簡易製法
米國製法
粉乳製造法
乳油製造法
乳油の成分
乳汁の脂肪
乳汁の管理
製乳室
乳皮
乳皮の分離
乳皮の醇熟
乳皮の管理
乳油の着色
攪乳器の回轉
乳油の精製
乳油の塡裝
乳餅製造法
乳餅の成分
乳汁の管理
レンネット
アンナット
日記簿
チエッダー製法
品質の標準
製乳場
酸性の乳漿
製造の次第
酸の發生過度なる時の取扱方
冷却せる凝乳冬時の注意
乳餅室
チエシア製法
グローセスターシア製法
ダンロップ製法
滓乳製の乳餅

附言

前記乳牛及製乳新書は目下印刷準備中に之あり遲くも來月下旬迄には相違なく發兌の都合に候へ共尚三四週間の日子を隔て居候に付購讀諸君の御便宜を計り此際豫約の意味を以て左の方法に從ひ貴需に應すへきに付期日までに金員相添御通知あらんことを希望す

十一月廿日まてに御申込の方は正價金四拾六錢の處**金三拾六錢**(外に郵稅金六錢)に特別割引の事

東京市日本橋區吳服町三十二番地　**牧畜雜誌社**　**發兌**

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

透谷子著

蓬萊曲

幽玄を旨としたる戲曲

場を蓬萊山に假り心を死したる戀人に寄せて大に天地の美妙を説き人間の醜惡を罵る、一篇の結構全く幽玄を旨とし、或は神、或は鬼、或は生、或は死、或は龍、或は月、是等の物を馳驅して縱橫に深鬱なる悲戀を述作す。題して蓬萊曲といふと雖實は地獄と天堂の間に蹈迷ひたる一想士の感慨を述たる悲壯曲にして、日本評論がドラマチック、ポエトリーの嚆矢なりと評したるもの即ち是なり。

正價十六錢の所を此度半減して八錢とし以て女學雜誌購讀者の愛顧に酬ふ

（但し別に郵便二錢を申受）

依托賣捌元　女學雜誌社

女學雜誌社出版書

子供のはなし　全

定價金五錢
郵稅金貳錢

目次

第壹回　田舍音樂師
第貳回　菫の君
第三回　熊と旅人
第四回　風と日の喧嘩
第五回　ハイ〳〵トタヾイマ
第六回　カンとクッドの話
第七回　王にも勝てる人々
第八回　母の愛
第九回　柔順なる娘
第十回　英雄の所業

正札引なし

新形流行

○はをり紐　品々
○帶留類　品々
○時計紐　品々
○メリヤス　品々

右ノ外組糸一切御好ニ應ジ精製
仕○御進物等ハ美麗ニ調進仕候

組糸老舖　日本橋區よし町　佐竹勝兵衛

○御用ノ節ハ御報知次第參館仕候

敬宇文庫設立資金募集

故文學博士中村敬宇先生學漢洋ヲ兼ネ旁ラ釋氏ニ通シ專ラ力ヲ教育ニ盡シ又嘗テ議政ノ職ヲ奉ス其政理ヲ助ケ文化ヲ補フノ効實ニ淺少ニアラズ先生藏書七八万卷アリ嘗テ文庫ヲ設立セント欲シテ未タ之ヲ計畫スルニ及ハザリシ客年六月俄ニ病ニ罹リ長逝セラル、ヤ門人故舊相集リ先生ノ遺德ヲ表章シ之ヲ永遠ニ傳ヘンヿヲ欲シ其方法ヲ謀ル僉曰ク其遺志ヲ繼クニ如クハナシト於是文庫ヲ設立シテ以テ先生手澤存スル所ノ書籍ヲ不朽ニ傳ヘ併テ後進ノ閲覧抄寫ニ便セント欲ス猶遺稿傳記ヲ編纂シ又建碑ノ擧ニ及ハントス抑文庫ヲ設立スルハ文運ヲ扶植スルノ一大事業ニシテ美擧ト謂フ可シト雖トモ頗ル巨費ヲ要スルヲ以テ吾輩同志僅々數十名ノ能ク辨スル所ニアラス四方ノ君子先生ノ遺德ヲ思ヒ吾輩ノ微衷ヲ諒シ此擧ヲ賛助シテ義捐アランヿヲ希望ス

敬白

委員長 辻新次

委員 伊藤祐穀　河津祐之　田村義次郎　植村俊平　吾妻兵治　佐々木高美　澁谷啓藏　伴直之助　神津仙三郎　中村正修　柳澤信太　相馬永胤　箕原貞明　關義臣

賛成員（いろは順）

岩村通俊君　侯爵 蜂須賀茂韶君　公爵 二條基弘君　細川潤次郎君　渡邊千秋君　渡邊國武君　法學博士 和田垣謙三君　文學博士 加藤弘之君　金井之恭君

理學博士 伊藤圭价君　花房義質君　西村茂樹君　子爵 岡部長職君　渡邊孝君　若尾逸平君　伯爵 勝安房君　文學博士 川田剛君　法學博士 金井延君

子爵 神田孝平君　高島嘉右衛門君　津田仙君　理學博士 村岡範爲馳君　大倉喜八郎君　前島密君　佐久間貞一君　岸田吟香君　島地默雷君　澁澤榮一君　子爵 土方久元君

子爵 谷干城君　津田眞道君　永井久一郎君　文學博士 井上哲二郎君　楠本正隆君　伯爵 佐々木高行君　理學博士 菊地大麓君　三島毅君　文學博士 重野安繹君　子爵 榎本武揚君　平山成信君

義捐者ハ住所氏名ヲ詳記シテ現金ヲ東京市日本橋區富澤町五番地第四十一國立銀行東京支店ニ御拂込ヲ乞フ該銀行ハ委員ノ領收證書ヲ交付スベシ○拂込金ハ現金又ハ東京渡リノ送金手形若クハ東京市江戸橋東京郵便局渡ノ郵便爲換ニテ前記第四十一國立銀行東京支店ニ御送付アリタシ○義捐金額數回ニ分割シテ御拂込アルモ差支ナシト雖トモ其金額ハ全額拂込ト分割拂込トヲ問ハズ可成速ニ事務所ニ御通知ヲ乞フ○事務所ハ當分東京市小石川區江戸川町十八番地中村正修宅ヲ以テ之ニ充テ敬宇文庫設立假事務所ト稱ス○敬宇先生又ハ同人社ニ緣故アル諸君ニシテ其住所不分明等ノ爲メ此度ノ通知ニ漏レタル方モ多カルベキニ付寄々御吹聽同志者誘引ニ御盡力アランヿヲ乞フ○本擧趣意書御入用ノ方ハ御申越次第御送付致スベシ

池袋清風大人の著日本綴上下二册

淺瀨の波

和歌の知るべ

正價金三拾錢　郵税金四錢

此書は有名なる池袋清風大人の著にして、案山子社中の藏版にかゝるものにして、我社出版の百人一首講義と共に歌道自修の御仁には頗る有益なるものなり、此道に志す御方は是非一本を坐右に供へ玉へ。

東京麹町區上六番町六番地

女學雜誌社

看護婦生徒募集廣告

來ル明治廿六年四月看護婦生徒募集候ニ付志望之者ハ本月三十日マテニ南豐島郡下澁谷村日本赤十字社病院へ申込ムヘシ

但年齢二十歳以上三十歳以下身幹四尺六寸以上ニメ健康獨身ノ者ニ限ル猶規則並ニ申込手續ハ病院ニ就テ承合スヘシ

明治廿五年十一月

日本赤十字社

轉居 麹町區下六番町六番地明治女學校内
右在寓土曜日午後ヨリ水曜日午後迄

迎接日 毎火曜日午後三時ヨリ

退養 水曜日夜ヨリ土曜日午前迄ハ王子ニ退養シ事務上ノ來訪ヲ謝絶シ且ツ書信ヲ受ズ命用ノ人ハ下六番町ノ方ヘ土日月火ノ四日ノ内ニ御申越ヲ請フ

巖本善治

女學雜誌市内賣捌店

麹町區上六番町 日盛堂
同三番町 梅仙堂
同 福音舍
同飯田町 三文字屋
同 洗心堂
神田區神保町 松江堂
同 青柳堂
同雉子町 大塚書籍店
牛込區神樂町 積善堂
同 正導舍
同肴町 深田彌兵衛
本郷區眞砂町 文壽堂
同 就本堂
同富士前町 解明堂
同 盛春堂
同二丁目 古河屋

下谷區東黑門町 三一堂
神田區松岡町 山口次郎
同旅籠町一丁目 槇本
同鍋町 清水嘉兵衛
日本橋區本町三丁目 庭花堂
芝區櫻田本郷町 鈴木新兵衛
同南佐久間町 栗原
同同 鈴木
赤坂區新町 赤川市兵衛
同同 飯田
京橋區尾張町 鈴々木
同出雲町 金盛堂
同 山田屋
本郷區天神町 改進堂
神田區小川町 大塚雜誌店
同錦町二丁目 長故堂

其他書籍繪双紙店に於而賣捌く

女學雜誌大取次所

東京市本町三丁目 瑞穗屋卯三郎
同錦町二丁目 武藏屋藤藏
同尾張町二丁目 東海堂
同彌左衛門町 巖々堂
同表神保町 東京堂
同出雲町 警醒社
同鐵砲町 指金堂
同元富士町 盛春堂
同雉子町 團々社
福岡縣福岡 積善館支店

神奈川縣橫濱市 共同新聞發賣會社
同同 万字堂
京都佛光寺烏丸 東枝律書店
同新町竹屋町 便利堂
大坂本町四丁目 岡島支店
同 福音社
神戸元町四丁目 福音社
函館市 福音社
熊本縣熊本 草野門平
京都新町二條 大黑屋書店

一書籍代金二十錢未滿は郵券代用不苦候、郵券は五厘切手一割増の事

一雜誌及び書籍代金通運便にて御送付の向は屆け賃とも濟にして御送付相成度候

女學雜誌代價

○白赤双方合せ講讀の分

冊數	前金	府外
十冊	前金 五十八錢	府外 六拾三錢
廿六冊(半年)	同 一圓四十三錢	同 一圓五十六錢
五十二冊(一年)	同 二圓六十錢	同 二圓八十六錢

○白赤の内一方講讀の分

冊數	前金	府外
六冊	前金 三拾五錢	府外 三十八錢
十三冊(半年)	同 七拾三錢	同 七十八錢
廿六冊(一年)	同 一圓三十錢	同 一圓四十三錢

一冊 金六錢 郵税 金五厘

廣告料及無料廣告

一行(廿七字詰)	一回	前金拾錢
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

○十行以上一割引。 二十行以上二割引。

○四十行同四割引。

但し不道德なる廣告は謝絶す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く

○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭くるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部 注文を要し以上半頁毎に十部增さと定む。

發行所
東京市麹町區下六番町六番地
女學雜誌社

編輯兼發行人 巖本善治
印刷人 堀口庄三